

平成29年度 環日本海文化交流史調査研究集会の記録

はじめに

センター所長 藤田邦雄

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで各地域と調査・研究を行い、交流を図ってきたもので、平成29年度で第18回目の開催となりました。

なお、当研究集会におきましては、本年度より調査研究の深化・充実を目的に、1年目を「基礎研究」、2年目をその成果を踏まえた「研究集会」とし、1年目の今年度は、近年北陸の近世城郭の調査で広く出土が知られるようになった近世成立期のカワラケ（土師器皿）に着目し、先行する戦国時代の資料からの系譜をたどりつつ、編年案を主眼とした基礎研究に充てております。

- 1 主 催 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 2 会 場 石川県埋蔵文化財センター研修室
- 3 参加者 当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者、大学生等90名
- 4 内容及び日程

テーマ 「近世成立期の土器・陶磁器様相—カワラケを中心に—」

日 時 平成30年2月23日（金）午前10時～午後4時20分

・報告

- 福井県(1) 阿部 来（勝山市教育委員会）
福井県(2) 中原義史（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）
石川県（加賀） 立原秀明（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）
石川県（金沢城） 滝川重徳（石川県金沢城調査研究所）
石川県（能登） 岩瀬由美（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）
富山県 堀内大介（富山市埋蔵文化財センター）

・資料検討会（出土資料の比較検討）

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載（石川県埋蔵文化財情報）
第1回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第2回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第8号
第3回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第10号
第4回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える	第11号
第5回	H16.10.29	古代日本海域の港と交流	第13号
第6回	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通－甕・壺・擂鉢を中心－	第15号
第7回	H18.10.27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心－	第17号
第8回	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－	第19号
第9回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H21.10.23	日本海域の土器製塙－その系譜と伝播を探る－	第23号
第11回	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通－肥前陶磁から探る－	第25号
第12回	H23.10.28	中世日本海域の墓標－その出現と展開－	第27号
第13回	H24.10.26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25.10.25	舟と水上交通	第31号
第15回	H26.10.24	江戸時代の墓	第33号
第16回	H27.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第35号
第17回	H29.2.24	環日本海文化交流史研究の展望	第37号
第18回	H30.2.23	近世成立期の土器・陶磁器様相－カワラケを中心－	本号（第39号）

越前における15～16世紀中葉の土器皿

阿部 来（勝山市教育委員会）

はじめに

越前における15～16世紀中葉の土器・陶磁器は、一乗谷朝倉館の調査を皮切りに諏訪間興行寺遺跡、一乗谷朝倉氏遺跡、福井城跡などの資料をもとに変遷が示されてきた（小野1979、南1992・1999・2003、富山1997）。また、北陸中世考古学研究会での検討（岩田・河村2006）や法土寺遺跡（南2003）、藤巻館跡、白山平泉寺旧境内などの資料から、16世紀の様相がより詳細に判明しつつある（阿部2009）。

その後も、中角遺跡（富山2010）、石盛遺跡（清水2013）一乗谷西山光照寺（櫛部2015）などで土器皿が詳細に分類され、良好な資料が充実してきた。今回は、土器皿の系譜の検討から様相を整理したい。

1 分類

器形の系譜を念頭に15世紀以降の京都産土器皿の影響が強いA類、B類と前時代からの系譜や在地化の著しいC～F類に分類する。

A類は、深手で丸みを帯びた底部から開き気味に緩やかに立ち上がり、口縁部が外反するものである。大型品は、口縁部の横ナデを2回以上施す事例が多い。小型品は、口縁部が強く屈曲するものもみられる。主に京都産土器皿の伊野Gタイプ（伊野1997）、中井皿H（中井2011）を模倣したと考える。

B類は、平底から直線的に開きながら立ち上がり、口縁部が外反するものである。口縁端部をつまみ上げる所作を行う。主に伊野Iタイプ、中井皿Kを模倣したと考える。

C類は、立ち上がり部分から強く外反するものである。14世紀以前の京都産土器皿、主に伊野Jタイプの影響を起点に変化したとみられる。

D類は、丸底から緩やかに内湾気味に立ち上がる器形である。口縁部の横ナデが不明瞭で、所作を伴わないものも含む。

E類は、平底から緩やかに立ち上がるものである。

F類は、底部から上方へ強く屈曲し、直立気味となるものである。

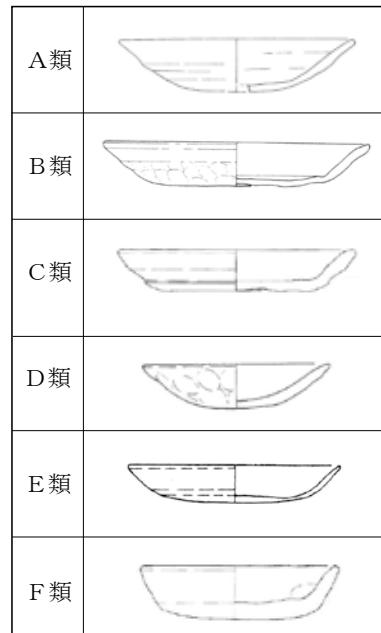


図1 分類概念図

縮尺不同

2 資料と変遷

越前焼など共伴する陶磁器の年代も勘案しつつ、基準となる資料について変遷を述べたい。

14世紀末から15世紀初め頃に位置づけられる資料としては、伝安楽寺遺跡、杣山城伝飽和宮跡がある。伝安楽寺遺跡は、包含層資料であるが、土器皿は11～12cm、7～8cmの大小2法量で構成され、大皿は底部際で強く屈曲し口縁部1段ナデによって強く外反するA類である。小皿は緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめるE類である。杣山城跡伝飽和宮跡は、A類とD類がみられる。

15世紀初めから中頃にかけては、石盛遺跡かわらけ土坑、堤遺跡SX01、中角遺跡堀4下層、中角

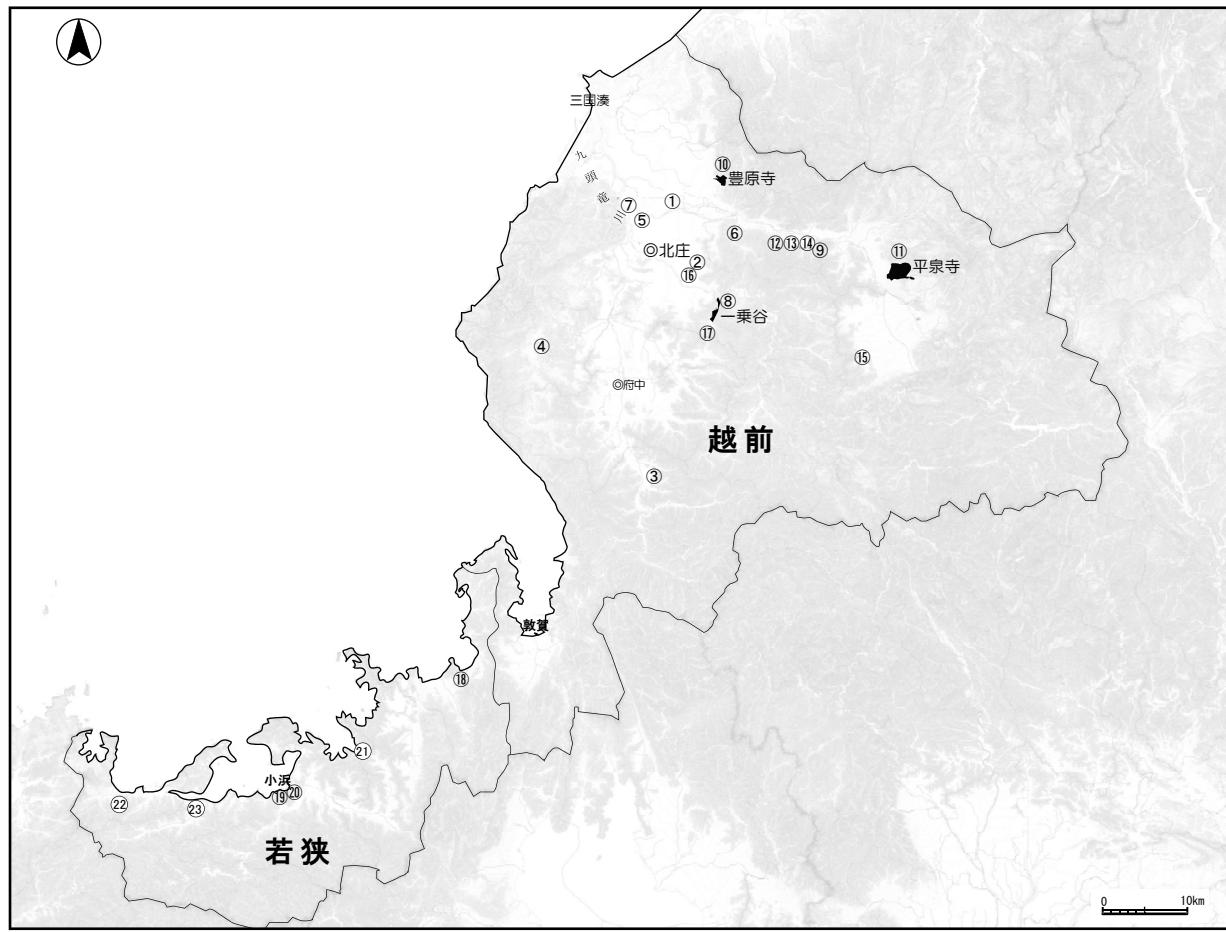


図2 遺跡位置図

基盤地図(情報1/25000 より作成)

【遺跡名・引用文献】

- 1 石盛遺跡 福井市教育委員会 2015『石盛遺跡』II
- 2 伝安楽寺遺跡 福井県教育委員会 1974『北陸自動車道関係遺跡調査報告書第6集』
- 3 桧山城伝飽和宮跡 南条町教育委員会 1978『史跡袖山城跡 II 伝飽和宮跡・外濠確認発掘調査報告』
- 4 堤遺跡 織田町教育委員会 2001『堤遺跡』
- 5 中角遺跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010『中角遺跡3』－II・III区上層編－』
- 6 諏訪間興行寺遺跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008・2010『諏訪間興行寺遺跡』I・II
- 7 法土寺遺跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003『法土寺遺跡』II
- 8 一乗谷朝倉氏遺跡 福井県教育委員会 1986『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』1～15ほか
- 9 藤巻館遺跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007『藤巻館遺跡』
- 10 豊原寺跡 丸岡町教育委員会 1982『豊原寺跡3』ほか
- 11 白山平泉寺旧境内 勝山市教育委員会 1992『白山平泉寺－南谷坊院跡発掘調査概報II－』ほか
- 12 大月前山遺跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011『大月前山遺跡』
- 13 竹原弁財天遺跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010『竹原弁財天遺跡』
- 14 藤巻多珍坊遺跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008b『藤巻多珍坊遺跡』
- 15 下黒谷遺跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998『下黒谷遺跡』
- 16 曾万布遺跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008c『曾万布遺跡』
- 17 三峰村寺跡 鯖江市教育委員会 2000『三峰村墓地跡』
- 18 国吉城跡 美浜町教育委員会 2011『国吉城址史跡調査報告書』1
- 19 後瀬山城跡 小浜市教育委員会 1989『後瀬山城』
- 20 若狭武田氏館跡 小浜市教育委員会 2014『若狭武田氏館跡関連遺跡発掘調査報告書』
- 21 館敷遺跡 三方町教育委員会 1994『館敷遺跡』
- 22 石山城跡 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005『石山城跡』
- 23 山田中世墓群 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群』

遺跡堀4中・上層、中角遺跡井戸16などが比較的良好な事例といえよう。

堤遺跡 SX01はA類とF類、中角遺跡ではA、C、D、E、F類、石盛遺跡かわらけ土坑ではD、F類が確認できる。この段階では、7～8cm、9～10cm程度の中小型品に加えて、13～15cm程度の大型品が加わり、新たな使用方法の定着を読み取ることができよう。法量と器形の関係は必ずしも一対ではなく、堤遺跡SX01はすべての器形で大中小を構成するが、石盛遺跡かわらけ土坑では大型品はD類、中小型品はF類となっている。

15世紀中ごろの基準資料としては、諏訪間興行寺遺跡Ⅲ期炭化物層がある。土器皿はB、D、E類が確認できる。後続する時期が主体となる、諏訪間興行寺遺跡Ⅳ期、法土寺遺跡、一乗谷朝倉氏遺跡24次Ⅰ期遺構面ではA、B、D、E類で構成される。

豊富な資料の存在する一乗谷朝倉氏遺跡では、50次SS2001に注目したい。50次SS2001は、複数回に及び道路面がかさ上げされており、ある程度の層位学的な裏付けを持つ資料である。

最下層では、B類の大皿は薄手の丁寧なつくりで、平底から直線的に立ち上がり、口縁部は外反気味で、口縁端部は細く尖り気味となるものが多い。また、大型品には、内底面際に凸状の圈線がみられるものが多く、ごく浅い凹状圈線の内側が若干肥厚し凸状を呈するものは少数である。16世紀前葉でも第1四半期の京都産土器皿に近いと考える。小型品にはB、D類がみられる。

最上層である1～2面のB類は、やや厚手で平底から直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚し外反気味で、口縁端部は丸くおさめるものと摘み上げるものがみられる。内底面際には鋭く凹む圈線が巡っており、京都産土器皿の16世紀第3四半期の特徴を示す。

また、16世紀第3四半期の基準資料となっている朝倉館の土器皿は、平底から直線的に立ち、口縁部を弱く外反させ、口縁端部を摘み上げるB類が主体である。中大型品は内底面際に鋭い凹状圈線がめぐる。この時期の器形と法量の関係は、多法量に展開するB類、小型品のみのD類というすみわけが明確になる。

16世紀第4四半期まで継続する、藤巻館跡遺跡でもB、D類が確認できる。B類は、平底から直線的に立ち上がる器形を基本とし、口縁端部は摘み上げるもののはか、側面から強くナデ、断面形は方頭状を呈するものがみられる。

このように16世紀代のB類は、凹圈線の明確化や器壁の厚手化のほか、口縁端部の鋭い摘み上げが徐々に鈍化し、方頭状になるといった型式変化をたどる。

おわりに

以上、越前のなかでも一乗谷に近い福井平野の資料を中心として変遷を整理した。この地域では、15世紀代に在地で展開する複数の系譜と京都の影響が顕著なものが法量を共有しながら併存し、16世紀になると大型品は同時期の京都に近い系譜にほぼ集約される。一乗谷朝倉氏遺跡では、とくに京都に非常に近い土器皿が生産されており、より直接的な交流の要であったと考えられよう。

複数の系譜から京都の系譜に集約されていく背景を明らかにするためにも、ほぼ同様の変遷をたどる内陸部の白山平泉寺旧境内や若狭の資料についても、今後比較を行っていただきたい。

ご芳名を逸する非礼をおそれ、逐一は記しませんが、多くの方々に資料調査などでご配慮をいただきました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

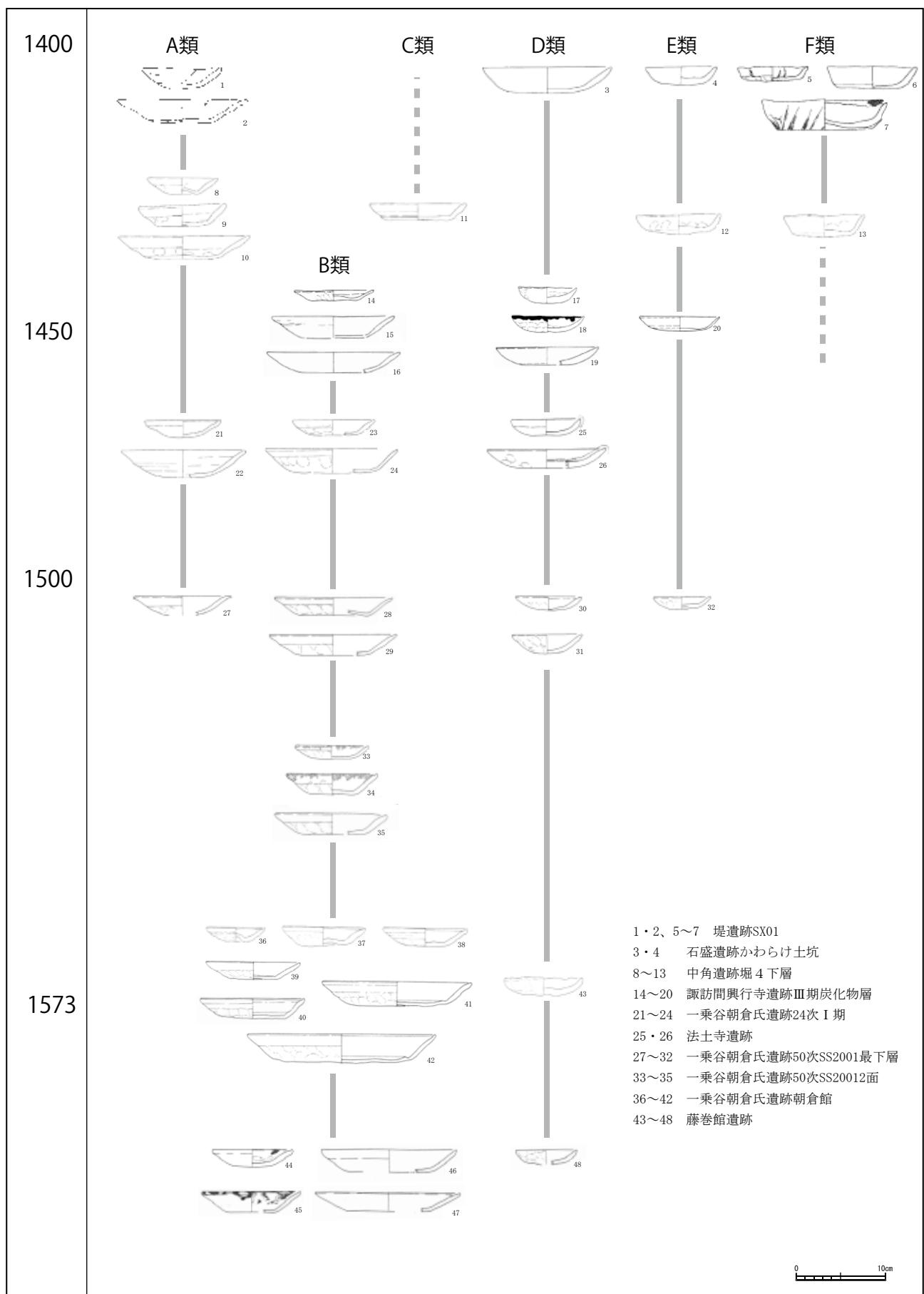


図3 土器皿の変遷(S=1/6)

【引用参考文献】

- 阿部来2009「土器皿からみた中世後期の越前」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要』2008 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 伊野近富1997「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 岩田隆・河村健史2006「越前における様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 小野正敏1979「第5章遺物2陶磁器類 B. 土師質土器」『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I 福井県教育委員会
- 櫛部正典2015「IV遺物2土師質土器」『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』11 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 小森俊寛2005『京から出土する土器の編年研究』京都編集工房
- 清水孝之2013「第3章遺構と遺物第3節遺物」『石盛遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 富山正明1992「諏訪間興行寺遺跡」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世考古学研究会
- 富山正明1997「越前国における13~16世紀の土師器編年」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史』桂書房
- 富山正明2008「第IV章遺物」『諏訪間興行寺遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 富山正明2010「第5章遺物第1節土器」『中角遺跡3-II・III区上層編-』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中井淳史2011『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版
- 野澤雅人2001「第4章第1節遺物」『堤遺跡』織田町教育委員会
- 南洋一郎1992「越前・若狭における様相」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 南洋一郎1999「一乗谷出土カワラケ基本分類基準」『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』VII 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 南洋一郎2003「第3章中世第2節遺物 1. 土師質土器」『法土寺遺跡』II 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

近世前半期越前のカワラケの諸様相—福井城跡出土資料から—

中原 義史（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

はじめに

ここでは、越前における16世紀末から17世紀にかけてのカワラケの基礎研究として、器形分類と編年案の提示を行う。本来なら、越前各地の城下町や集落遺跡の出土資料の検討を行うべきであるが、年代を絞り込める遺構出土資料の少なさから、今回は福井城跡出土資料のみを基に作業を行った。

1. 研究史

近世福井城跡のカワラケの年代観を最初に提示したのは河村健二氏で、『福井城跡』（2001）においてであった。その後、『福井城跡IV』（2004）で青木元邦氏により編年案が示された。さらに、『福井城跡』（2015）において、河村氏の器形分類を整理・補足する形で、岩田隆氏により新たな分類がなされ、編年の見通しが示された。現在のところ、この岩田編年を大きく変更する必要性はなく、以下では岩田氏の成果に若干の修正を加えてながら稿を進めてゆく。

2. 器形分類

『福井城跡』（2015）では、16世紀末から19世紀にかけてのカワラケを、B・C・D・G・H・K・R系の7つに分類した。この内、B・C・D系は一乗谷朝倉氏遺跡で出土するカワラケB・C・D類の形態や製作技法を受け継ぐものであるが、細かい点で両者に差異があるため、ここでは類と系として呼び分けている。

B系：手づくねで皿状に成形したもので、基本的にナデ調整は行わない。そのため、指押さえ痕がそのまま残り、全体に不整形で口縁は波打つ。法量は直径8.0cm以下のものがほとんどである。

C系：手づくねで皿状に成形したもので、内面を親指、口縁部外側を曲げた人差し指で挟むようにして回しナデを行い、一周した所でナデを外方に抜いて形を整える。底部がやや丸く、見込と立ち上がりの境界があまり明確ではない。口縁端部には、段を作り上につまみあげたような形態のものと、段を持たず上方にとがり気味に納めるものがある。内面の回しナデの範囲にも差異があり、見込中心付近からほぼ全面にナデがあるものをC系1、見込の途中からしかナデを行わないC系2、立ち上がり部分にしかナデを行わないC系3に細分することが可能である。C系2・3には見込に横ナデを行うものもある。

D系：手づくねで皿状に成形したもので、立ち上がり部内面を親指、外面を曲げた人差し指で挟んでナデを行い、一周した所でナデを外方に抜いて形を整える。一乗谷朝倉氏遺跡のD類では、ナデを抜く時にそれまでのナデ方向と反対方向に抜いており、この点が福井城跡D系と異なる。見込には横ナデを行い、底面はC系に比べて平らである。口縁端部には、段を作り上につまみあげたような形態のものと、段を持たず上方にとがり気味に納めるものがある。見込と立ち上がり部との境界がC系に比べて明瞭で、圏線状になるものが多い。この部分の形態の違いからD系を1～3に細分している。D系1は圏線状の部分が明瞭なもので、D系2には圏線状の部分が弱いものと、立ち上がりが大きく外反し器高が低いものをまとめている。D系3は圏線状の表現がわずかに残る程度である。D系1の内面には、ナデ調整の下に布目を残すものが比較的目につく。製作時の痕跡であるが、どのような作業に伴い付いたものかは不明である。

G系：一乗谷朝倉氏遺跡では出土しないもので、内型に粘土を押し付けて成形し、口縁部に挟みナ

デ、見込に横ナデを施す。底部には板目压痕を持つものが見られる。

H系：一乗谷朝倉氏遺跡では出土しないもので、形態はG系に似ているが手づくねで製作されたものである。G系に比べ、形がゆがんでいたり、内面に凹凸が見られたりする。

K系：一乗谷朝倉氏遺跡では出土しないもので、立ち上がりに内側に折り曲げるよう強く挟みナデを行う。立ち上がり内外のナデの深さが同じで、見込には横ナデを施す。

R系：一乗谷朝倉氏遺跡では出土しないもので、ロクロ成形で製作したものである。内面には回転ナデ、底部には回転糸切り痕が残る。

福井城跡出土のカワラケには、突起を付けて灯明皿の受皿としたと考えられる製品があり、これも今回の検討対象に含めた。その場合、カワラケ部分の器形や調整によって分類を行っている。また、福井城跡では上記の分類に入らないものも他に少数ながら存在している。

3. 基準資料

編年の基礎となる基準資料は、平成12～14年にかけて福井駅付近連続立体交差事業に伴い実施された福井城跡発掘調査（『福井城跡』2015）で出土したものから、遺構の性格や共伴遺物により廃棄時期が絞り込めるものを選んだ。紙数に限りがあるため、詳しくは原報告書を参照してもらいたい。なお、編年表中の遺物実測図の番号は報告書掲載の番号と同じである。

(1) 天正3年(1675)前後を下限とする資料 溝32179出土の資料で、共伴遺物から天正3年(1675)の柴田勝家による北庄城築城以前のものと考えている。北庄城築城以前に、この付近に「北庄」の町や朝倉一族の居館があったとされるが、明らかにそれに伴う遺構は確認されていない。本調査区でも、この時期の遺構は少なく、分布も散漫で遺構の性格は不明であった。資料は一乗谷朝倉氏遺跡のD類に分類できる。

(2) 慶長6年(1601)前後を下限とする資料 溝31126・32167・32187出土の資料である。慶長6～11年(1601～1606)にかけての結城秀康による福井城築城までに埋められており、それ以前の北庄城の屋敷地に伴う溝と考えている。資料は、B系、C系1・2、D系1に分類できる。

(3) 17世紀前葉に納まる資料 土坑34197・54109出土の資料である。福井城の武家屋敷地の土坑で、17世紀前葉の遺物がまとまって出土した。資料は、C系1・2、D系1・2に分類できる。

(4) 寛文9年(1669)前後を下限とする資料 旧河川42133・石組溝4220下層・池32127出土の資料である。旧河川42133・石組溝4220下層は寛文9年の大火後に、焼土を含む土砂で埋められており、この時期を下限とする資料群である。池32127は17世紀後葉までには改修に伴って埋められており、共伴する陶磁器は17世紀中葉のものが中心である。資料は、B系、C系1・2・3、D系1・2・3、R系に分類できる。C系2のカワラケには、粘土で把手を受けたものがあり、18世紀にかけての形態変化から、灯明皿の受皿として製作したものと考えている。

(5) 17世紀後葉から18世紀前葉にかけての資料 土坑3134上層・溝3205・土坑36026・36076・36141出土の資料である。いずれも武家屋敷地の境界溝や廃棄土坑で17世紀後葉から18世紀前葉の陶磁器と共に伴っている。遺物は、B系、C系1・2・3、D系2・3、G系、H系、K系、R系に分類できる。H系のものには把手が付いたものがある。

4. 編年案

以上の資料を基にして、福井城跡の16世紀末から18世紀前葉のカワラケ編年案を示す。大きくはI～IIIの3期に分けられ、I期は16世紀末から17世紀前葉、II期は17世紀中葉、III期は17世紀後葉

から18世紀前葉に相当する。

I期にはB・C・D系という一乗谷朝倉氏遺跡からの系譜を引くカワラケがそろっている。ただし、D類のナデの抜き方等には、一乗谷にはない新しい要素も見られる。I期については、16世紀末から17世紀初頭にかけてと、17世紀前葉の2時期に細分できるのではとも考えたが、画期を設ける明確な根拠が見いだせなかつたので、ここでは同一時期にまとめておく。

II期にはB・C・D系以外にR系が加わる。B系は、この時期の基準資料には含まれていないが、前後の時期に認められることから、この時期にもあったと考えている。また、K系も基準資料には含まれていないが、他の遺構での出土状況から、この時期に現れた可能性がある。さらに、この時期にはカワラケに把手を付けた、灯明皿の受皿が作られるようになる。

III期にはII期のものに加えて、新たにG・H系が加わる。把手付のものは、C系以外にG・H系のカワラケにも見られる。

出土量を見ると、C・D系が多数を占め、B系がそれに続き、他のものはごく少数である。なお、18世紀後半以降については、G系が主体を占めるようになり、C・D系は数を減らしていき、B系は見られなくなる。C・D系では、口縁端部の摘み上げ状の調整によって段を持つものは、新しくなるに従い少なくなっていく傾向がある。また、I期ではC系1・D系1系が多くを占めるが、II期以降は少なくなつて、III期にはC系2・3やD系2・3が中心となつてゐる。

5.まとめ

以上、岩田氏の研究成果を基に、福井城跡出土のカワラケの編年案を提示した。今回は時間の都合もあり、岩田氏と私が整理作業に携わつた調査地点のカワラケのみを対象としたが、今後は他の地点出土資料の比較検討も必要と思う。また、阿部来氏が担当した越前中世後期のカワラケ編年との関係についても、これから整理する必要がある。さらに、カワラケに関する他の検討課題として、法量の分布や油煙痕跡の有無などが考えられるが、今回は手を付けることができなかつた。

福井城跡出土カワラケの器形分類			
B系	手づくねでナデ調整無し。 小型品のみで、不整形のものが多い。	 32167-10	16世紀末～
	見込みと立ち上がりの境がD系に比べて不明瞭。 内面に回しナデを行う。	 32167-4	16世紀末～
	1 見込み中心付近から回しナデを行う。	 32167-8	
C系		 42133-41	
	2 見込みの途中から回しナデを行う。	 32127-8	
	3 立ち上がりのみに回しナデを行う。		
D系	見込みと立ち上がりの境がC系に比べて明瞭。 見込み端から回しナデを行う。	 32167-2	16世紀末～
	1 境が明瞭で、圓線状になる。	 54109-6	
	2 境がやや弱くなったものと、立ち上がりが大きく外反し器高が低いもの。	 36076-38	
	3 境が弱く、圓線状の表現がわずかに残る。	 36076-39	
G系	型成形	 3134上-26	17世紀後葉～
H系	G系に形が似るが手づくね	 36141-6	17世紀後葉～
K系	立ち上がりを指で挟んで、同じ深さまで挟みナデを行う。	 3134上-32	17世紀中葉～
R系	ロクロ成形	 32127-12	17世紀中葉～

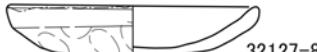
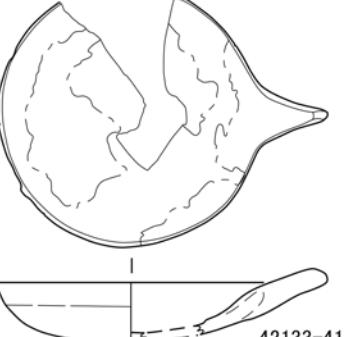
参考文献

福井県教育委員会 1979 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 I』

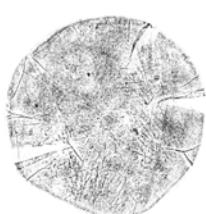
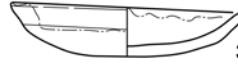
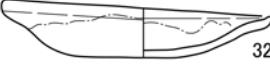
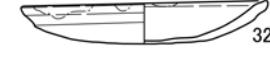
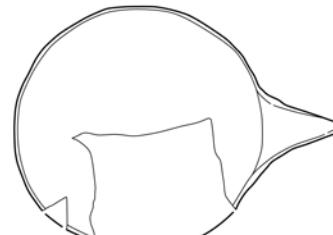
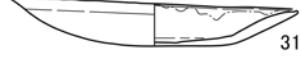
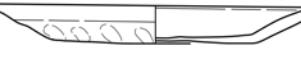
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001 『福井城跡』水環境整備事業（光明寺用水地区）に伴う調査

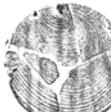
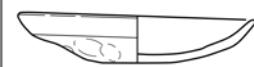
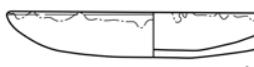
福井市文化財保護センター 2004 『福井城跡IV』福井駅付近連続立体交差事業および市道宝永清川線改善事業に伴う発掘調査

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015 『福井城跡』JR北陸線外2線連続立体交差事業に伴う調査

推定年代	B系	C系	D系
朝倉期 16世紀 中後葉			 
I期 16世紀末 ～ 17世紀初	 	 	 
II期 17世紀 前葉		 	 
II期 17世紀 中葉		   	

第1表① 福井城跡出土カワラケ編年（縮尺1/3）

推定年代	B系	C系	D系
III期 17世紀後葉～ 18世紀前葉	  <p>3134上-28</p>	 <p>3134上-30</p>  <p>3134上-31</p>  <p>3205-30</p>  <p>3205-28</p>  <p>3205-26</p>  <p>3134上-23</p>	 <p>3134上-25</p>  <p>3205-31</p>  <p>36076-37</p>  <p>36076-38</p>  <p>36076-39</p>

推定年代	K系	R系	G系	H系
II期 17世紀中葉		 <p>32127-12</p> 		
III期 17世紀後葉～ 18世紀前葉	 <p>3134上-32</p>  <p>36076-41</p>	 <p>36076-42</p>	 <p>3134上1-26</p>  <p>36141-6</p>	

第1表② 福井城跡出土カワラケ編年（縮尺1/3）

加賀における近世成立期の土器様相

立原 秀明（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

石川県加賀の中・近世における土師器編年については、藤田邦雄氏（藤田1997）、滝川重徳氏（滝川1998）、柿田祐司氏（柿田2006）がまとめている。

今回は滝川1998と柿田2006の編年を基にして、加賀地域の16世紀後半以降について金沢城及び金沢城下町遺跡以外の様相を取り入れることを試みた。なお、土師器皿の分類はA類を在地系とし、底部の形態により丸底と平底に分けた。B類は京都系で、その判断基準は能登地域を担当する岩瀬由美氏の分類に近いものと考えている。胎土の色調については、実見した資料のみ記述した。

編年概要

・15世紀

金沢市普正寺遺跡の中・上層面は15世紀前半に位置づけられる。これは集落の廃絶が文献資料にある嘉吉元年（1441）の砂丘移動によるものと推定されていることを時期比定の根拠としている。

遺構からの出土遺物は少ないが、遺構面に伴って土師器皿、青磁、白磁、瀬戸、珠洲などが出土している。土師器皿はA類のみが確認され、丸底で器壁が全体的に厚い。体部外側のヨコナデは強く明瞭な稜が形成される。

つづく15世紀中頃は小松市幸町遺跡（第2次）のSK1013を標識とする。鍛冶関連遺物とともに土師器皿、青磁、白磁、瀬戸、石製品などが出土している。土師器皿はA類のみが確認できる。底部は丸底・平底がともにみられる。大きさは大中小があり、法量の分化が進む段階である。

15世紀後半に位置づけられる加賀市勅使館跡のD2-2土坑は、土師器皿のみが陶磁器類を伴わずに出土している。県内におけるB類の出現期である。B類は大皿のみが確認され、深手で特に器壁が薄く、平底の底部から斜めに大きく開く体部で口縁端部を摘み上げる。

A類は中小があり、底部は丸底風と平底がある。器形は在地系であるが、京都系に特徴的な調整痕とされる「の」字状のナデ上げがなされるものや、見込みに凸凹線状の調整痕がみられる中皿がある。小皿は器壁が厚く平底から体部が直に立ち上がるという特徴を有する。胎土はB類が白色系でA類は茶色系と明確に分かれれる。

・16世紀

小松市銭畠遺跡の6号溝は16世紀前半に位置づけられる。共伴する陶磁器は少ない。土師器皿はA類とB類が確認できる。B類は大皿のみがみられ、前段階より器高の低下が指摘できようか。A類の丸底小皿は幸町遺跡につづくものである。

金沢市木越光琳寺遺跡の第9号溝は、掘り直しや埋め立てが行われているため遺物の一括性は低い。土師器皿はA類とB類があり、B類の法量は大小が確認できる。16世紀中頃として位置付けられる。

白山市鳥越城跡は遺物の一括性は高くないが、城が存続した時期が元亀元年（1570）から天正10年（1582）頃に限られることから、16世紀後半に位置づけた。A・B類ともに法量は大中があり、平底で器壁は薄く体部が直線的に開き口縁端部を摘み上げるものが多い。A類はB類よりも器壁が厚く口縁部端を丸くおさめる。底部は平底が多数で、丸底は小皿のみに少数みられる。胎土は白色系と橙色系に分かれ、B類の胎土は前者が多いが、後者も少なからずみられる。

・17世紀

小松市小松城跡は元和元年（1615）の一国一条令で廃城となるが、寛永17年（1640）に三代藩主前田利常の隠居城となった。SK16からは土師器皿、見込に砂目を残す肥前陶器、中国磁器、瀬戸美濃が出土している。土師器皿の数は少ないが、体部が開き口縁端を摘み上げるB類が主体である。

小松市大川遺跡は遺物の一括性は高くないが、三代藩主前田利常が家督を光高に譲った寛永16年（1639）頃に城下町の整備が始まったことから、17世紀中頃に位置づけた。土師器皿、中国磁器、肥前陶磁器、越中瀬戸、石製品、木製品などが出土している。B類は底部が平底、体部は直線的に開き口縁端部を摘み上げる。小皿に胎土の精良なものがある。

加賀市八間道遺跡NⅢSM-01は、10層以上ある整地層の第3層で検出された落ち込みである。土師器皿、中国磁器、瀬戸美濃、肥前磁器、唐津、九谷、石製品、木製品が出土しており、同層から出土した磁器片の化学的分析から17世紀後半の年代が得られていることを時期比定の根拠としている。

土師器皿の法量は大中小あるが10cm前後の中皿が主体のようであり、大きくは平底で体部が直線的または外反するものと丸底風で内湾するものに分けられる。前者は外底面付近にヘラ削りを施したもの、底部に糸切痕を残すものがある。後者は基本的にヘラ削りをしない。前段階とのつながりがよくわからないタイプであり検討を要する。明確にB類と判断できる土師器皿は認められない。

まとめ

A類の丸底厚手の小皿は鳥越城跡の段階までは確認できる。編年図では抜けている箇所もあるが、平底は基本的にどの段階にもみられる器形と考えている。勅使館跡の平底厚手の小皿は体部が直に立ち上がる形態で前後段階でのつながりが追えない。同市分校C遺跡に類似例があることから、加賀市近辺にみられる様相の一つなのかもしれない。また、八間道遺跡の土師器皿も前段階とのつながりが不明である。研究集会において、福井城跡では17世紀中葉にロクロ成形、同後葉に型成形された土師器皿が出土することを聞き、八間道遺跡の平底のものはロクロ成形で丸底の土師器皿は型成形である可能性が高いのではないかと考えるに至った。どちらも油痕が付くことから灯明皿として使用されたものと推察されるが、同時期に製作方法が異なる土師器皿を使用する理由やその系譜についてはよくわからない。

加賀地域でのB類は勅使館跡の段階に出現し、大川遺跡の段階まで確認できる。ただし大川遺跡の資料は一括性を欠いており、加賀地域におけるB類の終息段階については課題を残した。法量は14cm前後の大皿が16世紀末頃まで、中小皿は16世紀前半頃から17世紀中頃までは確認できるようである。

おわりに

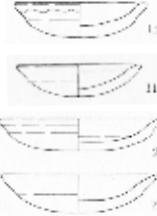
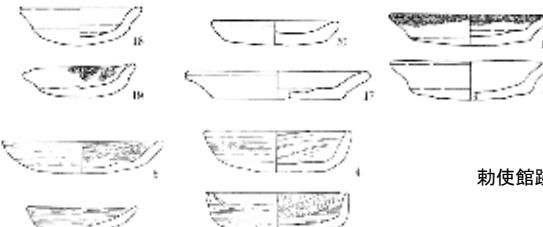
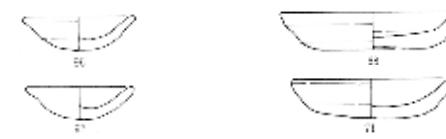
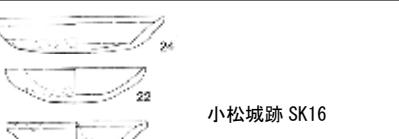
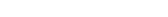
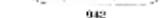
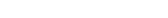
以上、加賀地域の土師器皿について編年案の作成を試みた。自身の不勉強によるところが大きいが、一括性の高い良好な資料があまりなく、取り上げた地域も南加賀に片寄ってしまい、課題を多く残す結果となってしまった。今後、良好な資料により修正すべきものと考えている。

引用文献

藤田邦雄1997「中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸』桂書房

滝川重徳1998「加賀地域・金沢周辺の土師器皿-15～17世紀-」資料

柿田祐司2006「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会

年代	藤田 1997期	在地系 (A)	京都系 (B)
		丸底	平底
	IV-II	 <p>普正寺遺跡上層面</p>	
	V-I ₁	 <p>幸町遺跡 SK1013</p>	
1500	V-I ₂	 <p>勤使館跡 D2-2 土坑</p>	
			
		 <p>木越光琳寺遺跡 9号溝</p>	
1600		 <p>鳥越城跡本丸</p>	
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
			
		<img alt="Archaeological drawings of two shallow bowls from the Tsuchiura Castle site." data-bbox="395 4285 535	

※当日資料を縮小化するにあたり配置等を変更している。なお、土器実測図は各報告書より転載している。

0 (1:5) 10cm

加賀地域の土師器皿編年図（案）

金沢城跡の土師器皿－16世紀後半～17世紀前半－

滝川 重徳（石川県金沢城調査研究所）

1. はじめに

金沢城跡は、金沢市街地のほぼ中央を占め、南東の山地帯より舌状に伸びる小立野台地の先端部分に立地する。前身は加賀一向一揆の拠点金沢御堂（金沢御坊）で、天正8年（1580）、織田政権の武将佐久間盛政の居城となるが、天正11年（1583）には前田利家が入り、以後近世を通じ、加賀藩前田家の本城となった。今回の主題である土師器皿を含め、1620年代以前の資料は決して多くはないが、城下町ではこの間の陶磁器・土師器皿の様相はより不鮮明で、今のところ、ある程度まとまった資料が認められるのは城とその周辺程度となっている。

2. 土師器皿の分類

1620年代以前の土師器皿の系統については、加賀地域の中世後半の状況を踏まえ、A：京都系土師器皿流入以前の在地型の系譜、B：京都系、C：京都系の退潮とともに出現した京都系的要素を持たない一群の3つに大別して捉えている〔石川県金沢城調査研究所2012・2014〕。

B類 平坦な底部から体部が斜め上方に開くこと、口縁端部に関し、内側に面を取る、あるいはつまみ上げなどの、特徴的な造作があることを目安としている。また胎土の特徴等から、能登で生産された搬入品が含まれると考えている。

C類 京都系土師器皿の終末前後にのみ認められる一群を一括してC1類、後出的で17世紀前半以後に繋がる系統をC2類として区分した。

C1類 様々な形態を一括しており、体部が中折れ気味に強く立ち上がり、見込み周囲の凹線が比較的深く入るタイプ、全体に丸みを帯びた浅い皿状を呈し、見込み周囲に凹線を有するタイプ、これに類似するが、底部がより平坦となるタイプ等が見られる。

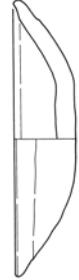
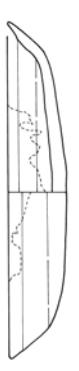
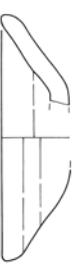
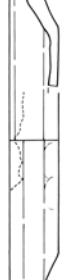
C2類 金沢城下町遺跡で一般に認められるもので、底部は平坦であり、体部の立ち上がりが急で口縁端が内屈気味となるI類、少数派で17世紀後半には見られなくなるII・III類がある。I類については、厚手の中・大型品を1、小型品を2と細分した〔石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002b〕。この他、薄手の製品を3としたが、年代がやや下る）。また体部ナデに先行する見込み一方向条痕が見られるものをa、見込みから部分的に体部下半まで乱方向のナデが施されるものをbとしている（この場合、底部外面に蓆目状・板目状の圧痕が付くことが多い）。

3. 土師器皿の変遷

変遷については、以下の通りI～Vの段階を考えている。

I 橋爪一ノ門下層整地土01[以下、出典は図注記参照]は、地山直上の最下層整地土中廃棄資料で、B類・推定能登産のみの構成で一括性が高く、儀礼行為を想起させる。丁寧な作りで口縁端部の伸び等に古相が窺えるとみて、前田家入城からさほど時を置かないもの（1580年代）と考えた。図示していないが、白鳥堀調査区下層〔石川県立埋蔵文化財センター1998〕・新丸第2次調査区下層〔石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002a〕の土師器皿は、B類が主体をなすもので（前者は在来とみられる少量のA類あり）、陶磁器全体の様相から16世紀後半としてIに含めて考えたが、遺物の中には1590年代に下るとされるものもあり、次のIIとの区別に課題を残している。

II 橋爪一ノ門下層SX02では、黄瀬戸、越中瀬戸大窯製品が共伴する。隣接する鶴ノ丸第2次調査

1610 年前後	P157 200005-D075		200704-D097 P151	
	P150 200704-D098		200704-D145 P132	
	河北門下層 SD006		200704-D150 P105	
			200704-D155 P134	
			200704-D149 P133	
IV 1620 年前後				C 2 (I 1) 類
			P311 199804-D067	
			P314 199804-D073	
			P318 199804-D063	
	五十間長屋台下層 第VI面 SD01		P320 199804-D090	
				199804-D089 P326
V 1630 年前後	本丸附段 (2004-1) SK11		P123	
			P138	
			P267 199804-D044	
			P269 199804-D053	
	五十間長屋台下層 第V面			

* 本丸附段 (2004-1) SK11・SK15 : [石川県金沢城調査研究所 2008] 第 117・119 図

* 河北門下層 SD006・SD007 : [石川県金沢城調査研究所 2011] 資料編第 223 ~ 228 図

* 鶴ノ丸第 2 次 SK3 : [石川県金沢城調査研究所 2015] 第 101 図

* 他 : [石川県金沢城調査研究所 2012] 第 58 ~ 61・64 図

金沢城跡における土師器皿の変遷 (16C 後 ~ 17C 前)



[石川県金沢城調査研究所 2012] 第 176 図一部改変

区SK2出土資料も類似の組成であり、同一面で検出された付近のSK3等も近い時期の所産と考えられる。土師器皿はほぼB類で占められる（SK3出土資料を図示）。なお内堀橋北詰下層SX01は、土師器皿の形状・組成等に大きな違いはないが、肥前陶器鉄絵皿が1点伴出している。混入の可能性も考えられるが、どの遺構も遺物量自体少なく、共伴する陶磁器組成の安定性に関しては不安が残る。ここでは次のⅢとの連続性も勘案し、Ⅱの推定年代を1590～1600年代とした。

Ⅲ 肥前陶器の他、美濃陶器織部製品、軟質施釉陶器（白化粧地に緑釉を流し掛けるもの）等が共伴する。土師器皿の変化傾向を考慮して、推定年代を1610年前後としたが、陶磁器組成の点では次のⅣとさほど変わらず、時期がなお下がる可能性もある。

本丸附段（2004-1）SK15、河北門下層SD007・006等の出土資料によると、B類は急速に減少する傾向が窺われる。一方でC1類が多数となるが、実態は様々な器形が並立する状況である。このうち、Ⅳ以降の主体となるC2I類に類似した器形もみられる。

Ⅳ 中国磁器漳州窯の粗製青花碗や、美濃陶器織部製品の中でも新しい傾向を持つタイプ等、大坂城下町の徳川初期1段階に特徴的なものが共伴する。

寛永8年（1631）造成の二ノ丸面から約6m下位に位置する五十間長屋台下層第VI面SD01（溝状の採土坑群）では、土師器皿はわずかにB類があるが、大半はC2I類となる。

この段階から城下町の資料が多くなり、中でも広坂1丁目遺跡Ⅱ SX2013[金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006]では、C2I類の土師器皿と元和9年（1623）銘の木簡が共伴し、Ⅳの推定年代を1620年前後とする論拠の一つとなっている。なおC2I1類の見込み調整痕はaが主体である。

Ⅴ 年代は寛永8年（1631）の大火灾を想定している。本丸附段（2004-1）SK11、五十間長屋台下層第V面等の出土資料によると、土師器皿はC2I1類が主体で、見込みの調整はbが増加する。

4. おわりに

15世紀後半以来、加賀・能登に浸透した京都系土師器皿（B類）は、金沢地域において、1580～1600年代は漸進的な変化傾向にあって土師器皿の主体を占めていたが、1610～20年頃にかけて著しく退潮する。この間は、少数となった京都系を補完するように、多様な形状の土師器皿（C1類）が形成されるが、短期間のうちに多様性は終息を迎え、その後は「金沢型」とも言うべき特定器形（C2類）へ集約化されるという、極めて急激な形で推移した。この背景には、供給側の再編や土師器皿の機能の変容等、この時代の社会全体の動向と直結する変化が予測される。その実態の解明には、資料の一層の充実に加え、事象を読み解く方法論の整備が課題となる。

引用・参考文献

- 石川県金沢城調査研究所2008『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所2011『金沢城跡－河北門－』
石川県金沢城調査研究所2012『金沢城跡－二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅱ－』
石川県金沢城調査研究所2014『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所2015『金沢城跡－橋爪門－』
石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002a『金沢市 金沢城跡Ⅰ』
石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002b『金沢市 木ノ新保遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター1998『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006『石川県金沢市広坂遺跡（1丁目）Ⅲ（近世編1）』

能登における15世紀中葉～17世紀初頭の土師器皿の様相

岩瀬 由美（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

1. はじめに

能登における土師器皿の編年については四柳嘉章氏や柿田祐司氏の論考（四柳1987・1997、柿田2006）があるが、編年案が発表された後に調査・報告された資料を用いて編年の空白域を埋め、15世紀中葉～17世紀初頭までの編年試案を提示する。

2. 型式分類

在地系の手捏ね土師器をA類、京都系の手捏ね土師器をB類とする。A類は細分すれば丸底タイプと平底タイプがあるが、系譜を追えるほどの出土事例がない。B類はヘソ皿や深身のタイプなど形態による分類に加え、内底面の調整痕（凸圏線や凹線の有無）等で細分可能である。また京都系土師器皿に対する模倣が形骸化したものなども一型式として分離可能であるが、それら細分類については今後の課題とする。なお、事例が僅少であるものの、ロクロ土師器皿や体部外面をケズリ調整する土師器皿が15世紀代に確認されており、これらの分類についても今後の課題としたい。

3. 編年概要

比較的良好な土師器皿の出土資料を抽出してその土器様相から15世紀中葉から17世紀初頭の土師器皿の編年概要を記す。

15世紀中葉までは在地系A類で占められる。丸底タイプと平底タイプが七尾市小島西遺跡B区SK25出土資料により、16世紀前葉頃まで使用されているのは明らかであるが、それ以降の動向ははつきりしない。法量・形態変化が追えるほどに資料の蓄積がないが、厚手化している様相が見て取れる。

京都系のB類は15世紀後半（瀬戸・美濃焼大窯製品が共伴しない段階）から確認できる。穴水町桜町遺跡SK01や七尾市定林寺前遺跡第1次調査1号井戸では大・中・小の法量が揃い、小皿にはヘソ皿が確認される。次の段階は瀬戸・美濃焼大窯製品が共伴する15世紀末～16世紀初頭・前半で、穴水町白山橋遺跡方形豎穴配石遺構や東三階A遺跡第1次調査SD02資料を当てる。白山橋遺跡ではB類ヘソ皿がやや目立つと報告されているが、形態的には前段階と変化がなく、土師器皿単体での時期比定は難しい。東三階A遺跡資料については、内底面に比較的明瞭な凹線が確認できるため、時期が降る資料の可能性もあるが、小片であり、出土点数も少ないとから共伴遺物の年代観を採用した。

七尾市小島西遺跡B区SK25とG区SK373はA類やB類ヘソ皿を含まない後者が新しい様相を示すと判断し、前者を16世紀前葉、後者を16世紀中葉に置いた。土師器皿の形態変化は追えない。小島西遺跡G区SK373とほぼ併行する資料として16世紀第2四半期頃とされる七尾城跡シッケ地区遺跡資料を置いたが、小島西遺跡資料よりも厚手で、凹線が明瞭な個体が含まれるため後出的な印象を受ける。時期の異なる製品が混在している可能性もある。七尾城跡05（2005年能越自動車道関連調査 未報告）SK09はB類にヘソ皿を含むが、ヘソの造り出しが形骸化しており、内底面の凸圏線も殆ど確認できないことから小島西遺跡G区SK373より後出すると判断した。時期差ではなく遺跡間の差異の可能性も想定できるが、凹線は弱く、共伴陶磁器に七尾城跡05 SK09の方が若干新しいものが含まれることも判断材料の一つとした。七尾城跡05 SK27資料はSK09資料と大過ないが、やや厚手化傾向が見られる点、凹線が明瞭化する点、共伴陶磁器が16世紀後半を中心とした製品であることからSK09に

後出する資料に位置付けた。

小島西遺跡E区SK161資料は16世紀末以降のB類の一形態とみて大過ない。体部の立ち上がりが強く、他のB類とは形状に差があるが、口縁部をつまんでナデる造作は京都系に通じるものである。同B区SD32資料は体部の開きが弱くなり、厚手化が顕著である。共伴資料から16世紀末～17世紀初頭頃に位置付けたが、16世紀後半とした七尾城跡05 SK27とはかなり形態差があるため、もう少し降る資料であるかもしれない。七尾城跡05 SK27との間をつなぐ資料の存在が想定される。七尾城跡05 SK27の次に編年されるべき、凹線が明瞭で厚手化した一群を七尾城跡08（2008年能越自動車道関連調査　未報告）出土資料に確認しているが、それでもなお小島西遺跡B区SD32資料とは形態的に乖離している。

4. おわりに

これまで明らかになっていなかった能登の16世紀以降の土師器皿編年について、小島西遺跡出土資料、及び七尾城跡2005年出土資料を当てることで、15世紀中葉～17世紀初頭の編年案を補完した。B類の大きな流れとして、15世紀後半から17世紀初頭にかけての器壁の厚手化や器高の減少、模倣の形骸化等が指摘でき、凸圈線から凹線顕在化への流れも追うことができた。ただし、土師器皿を一個体として見た場合には明瞭な型式変化は追えず、全体的な出土傾向・乏しい共伴遺物からの編年観提示となった。また、資料が七尾市に偏在していることから能登全域に普遍的な様相と言えるのかどうかも現時点では不明である。今後は資料の増加を待ちつつ、切り合い関係のある遺構出土資料の精査や、共伴遺物の廃棄年代等も考慮した上で年代観の修正作業が必要となってくる。

参考文献

- 穴水町教育委員会 1987 『西川島』
石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2008 『七尾市 小島西遺跡』
石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2009 『七尾市 東三階A遺跡』
石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2005 『羽咋市 四柳白山下遺跡 I』
石川県立埋蔵文化財センター 1995 『谷内・杉谷遺跡群』
柿田祐司 2006 「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸・美濃製品』 北陸中世考古学研究会
鹿島町 1996 『鹿島町史 資料編』
中島町教育委員会 1998 『定林寺前遺跡』
七尾市教育委員会 1992 『七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書』
四柳嘉章 1987 「中世土師器の編年」『西川島』穴水町教育委員会
四柳嘉章 1997 「能登国における土師器の編年」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編

A類 在地系	手捏ねで、京都系土師器が入る以前から作られているものの系譜を引き、調整などに京都系土師器の影響が見られないもの。 ・丸底と平底に細分可能	
B類 京都系	手捏ねで、京都の土師器の形態・調整を模倣したもの。 ・体部は緩やかに開き、口縁端部をつまみ上げる、又は端部内面にナデによる面を形成する。外面は口縁付近のみをナデ調整する。 ・内面調整の結果、内底面に凸凹線・凹線が観察される個体がある。 ・内面調整は小型品に「の」字状ナデ、中型品以上に「2」字状ナデを施すものがある。 ・小・中・大・特大の法量がみられる。小皿にはヘソ皿が含まれる。 ・模倣が形骸化したものがみられる。 (今後細分が必要)	

第1図 土師器皿型式分類

能登における 15世紀中葉～17世紀初頭の土師器皿編年試案

年代	四柳編年時期区分	在地系 (A)	京都系 (B)
1450	III-3		
		武部遺跡	
1500	IV-1	 谷内ブンガヤチ遺跡 10号井戸	 桜町遺跡 SK01 定林寺前遺跡 1次 1号井戸 四柳白山下遺跡 2次 D地区 I面 SE2
1500	IV-2	 小島西遺跡 B区 SK25	 白山橋遺跡 方形竪穴配石構造 東三階 A 遺跡 1次 SD02
			 小島西遺跡 G区 SK373 七尾城跡 シッケ地区遺跡
			 七尾城跡 05 SK09(未報告資料) 七尾城跡 05 SK27(未報告資料)
1600	IV-3	 小島西遺跡 E区 SK161	 小島西遺跡 B区 SD32
			以後不明
		(七尾城跡 05 以外は参考文献より転載)	

第2図 編年試案

富山県（富山城跡・富山城下町遺跡主要部）の様相

堀内 大介（富山市埋蔵文化財センター）

1. はじめに

近年富山市街地の再開発によって、富山城跡や富山城下町遺跡主要部において発掘調査が行われている。その中でも、平成26～28年度に富山城跡三ノ丸で行った総曲輪レガートスクエア整備に伴う発掘調査で、15世紀～19世紀までの遺構・遺物を確認したことから、中世から近世に至る状況を把握することが可能である。今回は、富山城跡（総曲輪レガートスクエア）出土品を中心に富山城跡・富山城下町遺跡主要部の遺物から15世紀～17世紀のカワラケについて検討する。

<富山城跡の時期区分>

14C ?～1543頃	莊園富山郷期
1543頃～1605	中世富山城期
1560	神保長職自焼没落
1585	佐々成政降伏、城破却
1605～1660	慶長期富山城期
1609	慶長の大火
1640～1660	富山藩借城
1661～19C	藩政期富山城期

2. カワラケの器種分類

非 口 ク ロ	A類	・口縁端部に一段のヨコナデを施す ・底部は丸底、平底の両者がある	
		・底部から口縁部が直接外反 B類 ・底部と口縁部の境にヨコナデによる稜をもつ ・底部は平底である	
	C類 (京都系)	1 ・体部が開き気味に立ち上がる ・口縁部はヨコナデして外反 ・ヨコナデの強いもの、弱いものがある ・口縁端部は丸く納めるもの、つまみ上げるものがある ・細分の余地が大きい	
		2 ・体部が開き気味に立ち上がる ・口縁部はヨコナデして短く外反 ・ヨコナデの強いもの、弱いものがある	
		3 ・体部が開き気味に立ち上がる ・口縁部はヨコナデして外反 ・口縁部内面に端面形成	
	(能登系)・胎土に海綿骨針が混じる		
	RA類	・口縁部はヨコナデして外反 ・底面および体部下半に回転ヘラケズリ	
		RB類 ・底部回転糸切り	



3. カワラケの変遷

富山城跡における非ロクロのカワラケの編年が、第1図である。ここでは、各時期の器形の変化について、みていく。

15世紀代は、主にA類と京都系C1類が存在し、少量のB類がある。

16世紀初頭～前半にはB類は存在しなくなるようで、A類と京都系C1類・C2類となる。C1類は明瞭な稜が出来る程強くヨコナデして外反するものが出現し、その中から口縁部が短く外反するC2類が派生する。C1類には口縁端部をつまみ上げるものが増える。16世紀中頃～17世紀前半までは16世紀前半と同じ器形が継続するが、16世紀後半からはC1類・C2類のヨコナデは緩やかになる傾向にある。16世紀後半になると、口縁部内面に端面を形成するC3類が出現する。

17世紀中頃には、A類・C2類は存在しなくなるようで、京都系のみとなる。この時期のC3類の器形は、金沢城で出土する箱型と呼ばれる器形と類似しており、前田利次が富山城を仮住まいとした借城期に当たることから、金沢の影響が強く表れているのかもしれない。17世紀後半～18世紀前半には、底部が丸底化する。この器形変化も金沢での器形変化と類似している。

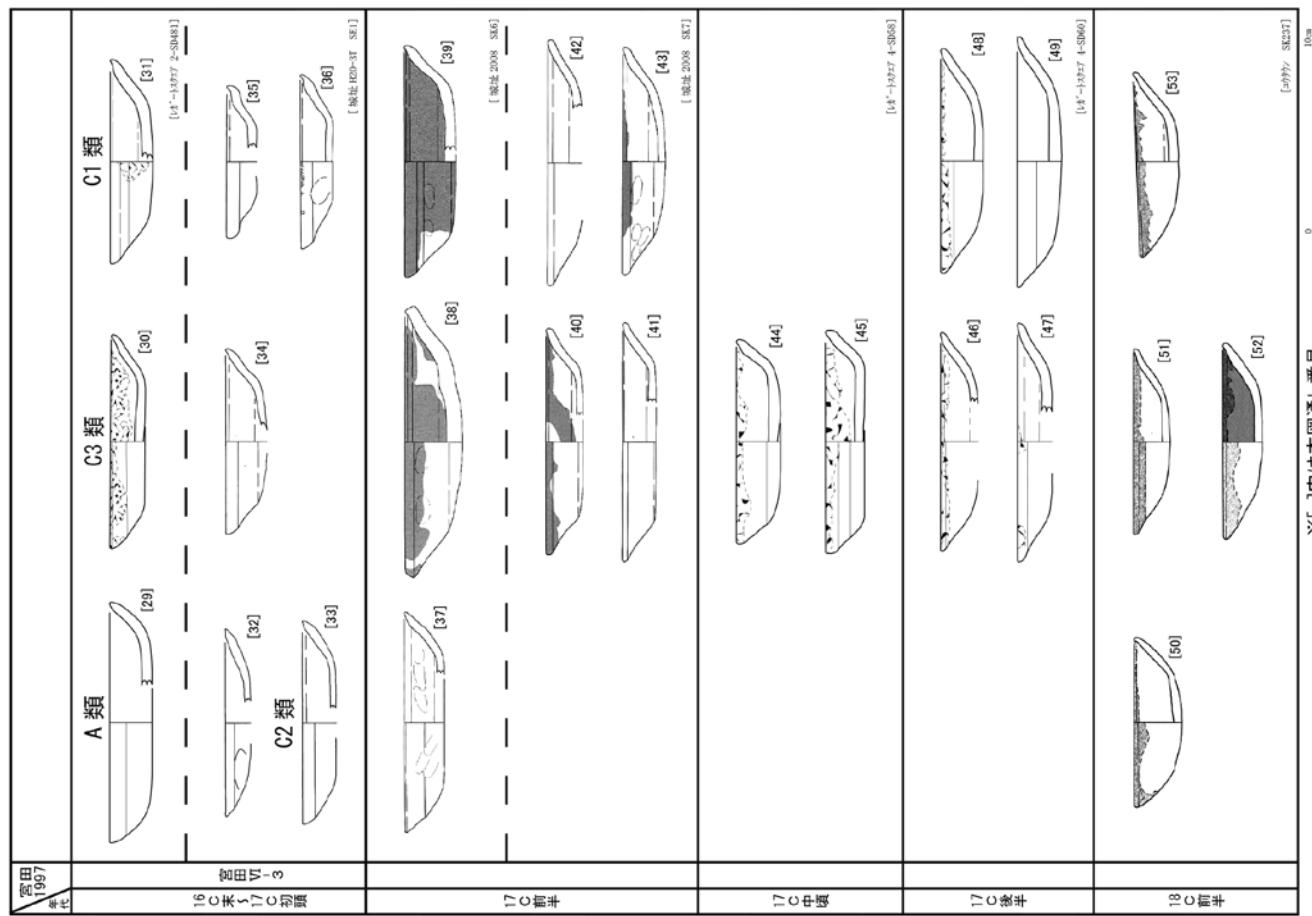
図は表示していないが、胎土に海綿骨針が混じる能登系土師器はほぼ全時期を通して、ごく少量確認できる。また、ロクロ土師器が15世紀後半に確認できる。

4. おわりに

第1図で非ロクロのワカラケの編年を示したが、特に京都系土師器C類の細分化や内底面の圈線の有無などの製作技法に関すること、法量や用途に関することなど多くの検討課題が残ったため、改めて検討したい。

参考文献

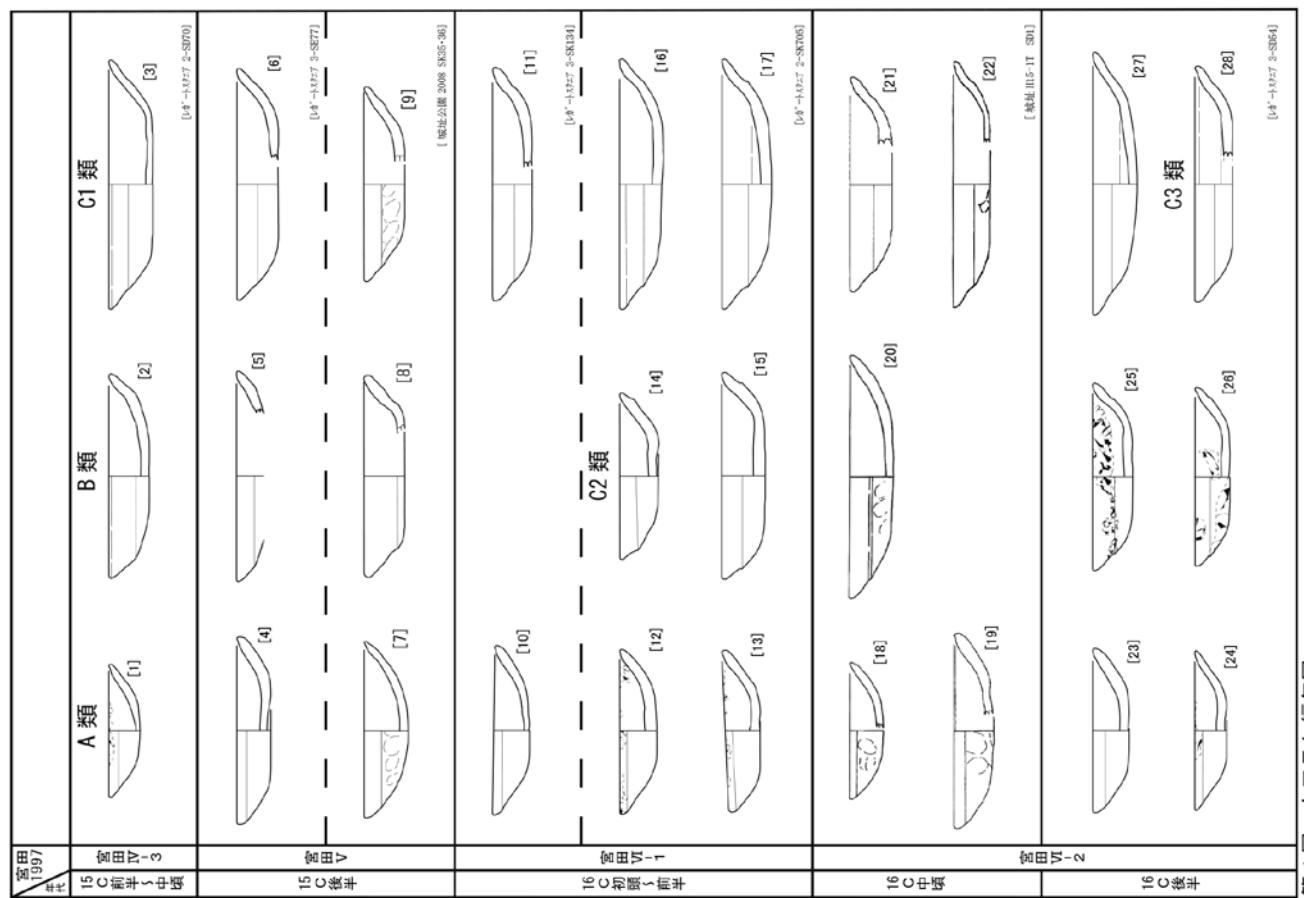
- 越前慎子 1996 「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）』 富山県文化振興財團
- 高梨清志 2006 「富山県の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会
- 富山市教育委員会 2004 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2009 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2015 『富山城跡 富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告79
- 富山市教育委員会 2016 『富山城跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告81
- 富山市教育委員会 2017 『富山城跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告87
- 富山市教育委員会 2018 『富山城跡発掘調査報告書』 富山市埋蔵文化財調査報告93
- 堀内大介 2017 「近世土師器皿・越中瀬戸素焼皿の集成～富山城跡・富山城下町遺跡主要部の出土遺物から～」『富山市考古資料館紀要』 第36号 富山市考古資料館
- 宮田進一 1992 「越中における中世土師器の編年」『中世前期の土器・陶磁器・漆器』 北陸中世土器研究会
- 宮田進一 1997 「越中における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史』 北陸中世土器研究会
- 森 隆 2003 「富山県の中世土器（資料編）」『富山考古学研究』 第6号 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所
- 森 隆 2005 「富山県の中世土器（資料編2）」『富山考古学研究』 第8号 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所



※[]内は本図通し番号

10cm

第1図 カワラケ編年図



資料検討会

報告の後、北陸3県の出土資料を持ち寄り、検討会を同会場で約1時間（15:20～14:20）行った。検討会に先立ち、各報告者の遺物説明があり、参加者は各県の特徴を把握したうえで、検討会に移った。福井城跡出土資料、金沢城跡出土資料、富山城跡出土資料、県内出土資料を中心に遺物を見ながら活発な意見交換がなされた。

いわゆる京都系カワラケの出自、福井城跡に見られる把手をつけた灯明皿の受皿の系譜、素焼きの越中瀬戸の存在など興味は尽きなかった。

今回の研究集会を基礎研究とし、来年度にこの成果を踏まえ、編年研究を主眼とした研究集会を開催する予定である。
(白田義彦)



阿部講師の遺物解説



中原講師の遺物解説



立原講師の遺物解説



滝川講師の遺物解説



岩瀬講師の遺物解説



堀内講師の遺物解説